

特別賞 三省堂書店賞

『幕末史』 半藤一利著（中央開架 210.5/875//H）

経営学部 4年 宮政博人

全ての「事実」には、様々な見方が存在する。我々が日々何気なく目にする新聞の記事も、ニュースも、だれかの視点を通して伝えられる情報であり、その裏側には私たちが考えもしなかったまた別の「事実」が隠されていることがある。そのように世の中をまた違った視点をもって眺めるということは、この情報化社会において必要となる姿勢である。しかしそうした態度を身につけることは、頭で分かっているとしても実践に移すことは難しい。

そのためには、一度は自身の固く信じる、または世間に信じられている固定概念とも呼ぶべき「事実」を全てひっくり返されるような経験が必要である。『幕末史』は、まさにそうした私たちの強く信じる一つの「事実」を粉々に破壊するほどの力と情熱を秘めた一冊である。

著者である半藤一利氏の先祖は佐幕派である長岡藩士であったため、本書を通じて描写される幕末という時代は、一貫して皇国史観、いわゆる薩長史観に対する反発が根底にある。本書は1853年から1878年という幕末期から明治初期を徳川斉昭、徳川慶喜、勝海舟など佐幕派の人物の活動を中心に、一次史料だけでなく、時に司馬遼太郎といった歴史小説家の言葉などを引用しながら描かれている。もちろん西郷隆盛や坂本龍馬、木戸孝允など新政府側の人物も登場する。しかし彼らに対する評価は、広く受け入れられている英雄としての姿ではない。

著者の反発する皇国史観というものが、平成生まれの私の持つ、小説やアニメ、ドラマといったポップカルチャーの影響を受けた、「明治維新においては薩長こそが先進的でより未来を見据えており、幕府は保守的であり国を滅ぼしかけた元凶である」という自分の中の幕末という「事実」と同じかどうかは分からない。しかし本書を読み進めてゆくうちに、激流のように押し寄せる、「西郷は毛沢東と同じ」「龍馬には独創的なものはない」とすら言い切ってしまうほどの強いメッセージによって、こうした「事実」は一度粉々に破壊されてしまった。同時に、そのまま「幕府＝正義、官軍＝悪」、という考えにそのまま屈しそうなったが、「歴史には様々な見方がある」という、破壊者である著者自身の言葉を背に、幕末という時代を皇国史観でも佐幕史観でもない、自分自身の新しい幕末という「事実」を構築することができた。

その達成感のままに新聞やインターネットを通じて「事実」に再び触れた際に、その裏にあるまた別の「事実」があるのでは、と立ち止まって考えることができるようになり、日々受け取る膨大な情報に対する自分自身の態度の変化を感じた。

『幕末史』は単なる幕末という時代への新しい視点を提供する歴史書であるということに留まらず、この情報の溢れる生活の中で、与えられる事実の裏にある、また別の「事実」を受け入れるための土壌作りの一助ともなる一冊である。